

# 末木恭彦先生 略歴および業績

## 《略 歴》

壬辰歳（昭和二七年、ヒジュラ暦一三七一年、イラン暦（ヒジュラ太陽暦）一三三二年、基督教紀元一九五二年）ヒジュラ暦は他の暦とズレが大きいため以下略す

八月二日 山梨縣甲府市に誕生。父剛博（たけひろ）、母みえの次男。三歳上に兄文美士（ふみひこ）がいる。

辛亥歳（昭和四六年、一三五〇年、一九七二年）

二月 桐朋高等学校卒業（注1）

壬子歳（昭和四七年、一三五一一年、一九七二年）

四月 東京大學教養學部文科三類入學。第二外國語に中國語 伝説的教師工藤篁の指導を受ける

甲寅歳（昭和四九年、一三五三年、一九七四年）

四月 文學部一類中國哲學專修に進學

丙辰歳（昭和五一年、一三五五年、一九七六年）

三月 文學部卒業。文學士。卒業論文『朱子の學問論』

四月 東京大學大學院人文科學研究科中國哲學專門課程修士課程入學。指導教官山井湧（やまのい・ゆう）

戊午歲（昭和五三年、一三三七年、一九七八年）

三月 修士課程修了。文學修士。修士論文『朱熹に於ける循環の論理―朱熹の思惟の基本構造についての試論』

四月 博士課程進學。指導教官引き續き山井湧

福永光司の影響もあり博士課程に進んで朱熹と道教の關係を研究主題とする。

己未歲（昭和五四年、一三五八年、一九七九年）

十月 寺小屋講師（〜昭和六〇）（注2）

辛酉歲（昭和五六年、一三六〇年、一九八一年）

三月 東京大學大學院博士課程所定單位取得の上退學

四月 文部教官助手に任ぜられる。東京大學文學部中國哲學研究室勤務（〜昭和六十一年）

甲子歲（昭和五九年、一三六三年、一九八四年）

三月 徂徠シンポジウム開かれる。於八王子大學セミナーハウス。

黒住眞（現東京大學名譽教授）、平石直昭（現東京大學名譽教授）、小島康敬（現國際基督教大學名譽教授）と共に準備に當たる。呼び掛け人、司會を務める

乙丑歲（昭和六〇年、一三六四年、一九八五年）

九月 仁齋シンポジウム。於大阪大學豊中キャンパス

「徂徠シンポジウム」の成功を承け、若手の江戸儒學研究者交流の場として開催された。

十月 駒澤大學非常勤講師。外國語部中國語教室（～平成九年）

丙寅歲（昭和六一年、一三六五年、一九八六年）

四月 私立東海大學講師に任ぜられる。文學部日本文學科に勤務

庚午歲（平成二年、一三六九年、一九九〇年）

四月 東海大學助教授に昇任

辛未歲（平成三年、一三七〇年、一九九一年）

四月 中央大學兼任講師。文學部哲學科（～平成六年）

乙亥歲（平成七年、一三七四年、一九九五年）

四月 東京都立大學非常勤講師。人文學部中國文學科（～平成八年）

丙子歲（平成八年、一三七五年、一九九六年）

四月 東海大學教授に昇任

丁丑歲（平成九年、一三七六年、一九九七年）

三月 東海大學を辭す

四月 駒澤大學教授就任。文學部文化學教室勤務（注3）

東海大學非常勤講師。文學部日本文學科（～平成一〇年）

専修大學大學院非常勤講師。文學研究科國文學專攻擔當（～平成二二年）

己卯歲（平成一一年、一三七八年、一九九九年）

四月 中央大學兼任講師。文學部哲學科（～平成一二年）

辛巳歲（平成一三年、一三八〇年、二〇〇一年）

四月 東京大學非常勤講師。教養學部前期課程國語漢文學教室（～平成一四年）

壬午歲（平成一四年、一三八一年、二〇〇二年）

四月 東海大學大學院非常勤講師。文學研究科日本文學專攻擔當（～平成二五年）

癸未歲（平成一五年、一三八二年、二〇〇三年）

四月 文化學教室主任（～平成一七年）

甲申歲（平成一六年、一三八三年、二〇〇四年）

四月 東京大學非常勤講師。教養學部前期課程國語漢文學教室（～九月）

乙酉歲（平成一七年、一三八四年、二〇〇五年）

四月 駒澤大學在外研究國內長期を取る。東京大學人文社會系研究科・文學部中國思想文化研究室私

學研修員（～平成一八年）

丙戌歲（平成一八年、一三八五年、二〇〇六年）

四月 總合教育研究部文化學部門に配置換え

丁亥歲（平成一九年、一三八六年、二〇〇七年）

四月 文化學部門主任（～平成二一年）

注1、高校時代學生叛亂と關わる。異例となるが桐朋高校に於ける學園鬭争と末木の關わりを記しておく。個々の高校に於ける學生叛亂は記録に留められることなく忘れられていくようなので些かの資料となる様に。

末木の學生運動との關わりは高校一年秋社會部社會問題研究班（通稱社研）参加に始まる。當時桐朋には社學同系の有力な生徒がおりその影響力が強かった。末木はアナキズムに惹かれていた。二年秋第一次桐朋鬭争。封鎖は失敗するが學校側が授業を止めクラス討論を中心とした生徒と學校側の對話を行う。此の結果制服の廢止・カリキュラムの彈力化が實現する（カリキュラムの彈力化は一、二年で撤回される、制服の廢止は現在に至る迄維持され、自由な學園桐朋の象徴視されている）。この時期末木はノンセクトの同志と桐朋ノンセクト集団（TNG）を結成している。三年四月入學式鬭争。此の爲末木も戒告處分を受ける。この頃から家族との關係・黨派性を強めていく運動に對する異和感から運動と距離を置くようになる。六月十五日全學ストライキ（生徒會に於ける決定による）。但し學校は授業を強行、末木も一限實力試験を受け、答案を完成後ストライキに参加する。時間とともに参加者は増加。七月強硬派による教員室封鎖（此の封鎖は學校側の逆封鎖で封鎖に参加しなかった鬭争派生徒との聯絡が阻まれ、生徒側の完全敗北に終わる）。封鎖参加者十一名が退學（強制轉校）になる。事後學校側による説明會が開かれる。この場では末木は質問に立ち學校側の問題點を追求するが、力不足を強く感じる。秋以降處分撤回集會が度々近隣の一橋大學構内で開かれる。然しもはや生徒に訴える力はなかった。

注2、寺小屋教室は始め語學教室で始まる。次第に思想的文獻を読む講座が増えた。清水多吉・片岡啓治が

中心であった。末木は始め「日本の儒學」講座講師として参加。「日本の儒學」講座は寺小屋運営の幹部であった澤井啓一（當時早稻田大學東洋哲學專攻博士課程）が設置し、始め尾藤正英（當時東京大學國史教授）を講師にし、文献を読む講師は山本仁（當時東京大學大学院中國哲學博士課程）が勤めていた。山本仁が助手に採用され辭し、代わって末木が講師に就いた。

寺小屋は學生叛亂の反省に立って原典から思想を學ぶという方向性があつた。會員は學生叛亂に關係した者が多かつた。大學を離れたが學びを續けたいという人も少なくなかつた。又大學に不満を抱く學生・院生も多かつた。「日本の儒學」講座は後「荻生徂徠研究」講座になる。更に壬戌歲寺小屋語學・文化研究所が設けられ「徂徠研究會」として研究所に所屬する。（寺小屋思想 文化研究所が正式名稱。ただ思想と文化の間の空格が誤解を招き易いのでクロマルを入れた）なお「徂徠研究會」は寺子屋（乙丑歲三月）解散後も有志の研究會として存續し、途中メンバーの入換りはあるが癸卯歲三月現在も活動しており、末木も一貫して参加している。

注3、乙亥歲から駒澤に來ないかという話が出ていた。その第一歩として「哲學概説」を擔當した。丙子歲中國語非常勤時代講師室で國嶋一則先生から正式に駒澤轉任の話が出る。少し迷うが受諾する。

《業 績》

〔單行本〕

- 1、朱子學的思惟（有田和夫・大島晃編、共著）（汲古書院、平成二年二月）〔朱熹聖人觀の一端〕三六五頁～四〇一頁）
- 2、現代語譯碧巖錄（全三冊）（末木文美士以下七名の共同譯注）（岩波書店、上 平成十三年三月、中 平成十四年三月、下 平成十五年三月）（現在岩波オンデマンドボックスに入る）
- 3、徂徠と崑崙（單著）（春風社、平成二八年二月）

〔編著書〕

- 1、朱子文集固有名詞索引（山井湧監修、大島晃他七名と共編）（東豊書店、一〇五五頁、昭和五五年一月）

〔論文〕

- 1、朱熹と道教をめぐる一側面―『陰符經考異』考（『東方学』第六〇輯（東方学会）、八一頁～九五頁、昭和五五年七月）
- 2、荻生徂徠の論語観（『寺小屋語学・文化研究所論叢』創刊号、九五頁～一二三頁、昭和五七年七月）

- 3、荻生徂徠の聖人觀―孔子聖人考（『寺小屋語学・文化研究所論叢』二号、一四一頁～一六一頁、昭和五八年一〇月）
- 4、陰符經考異の思想（『日本中國學會報』第三六集、一六二頁～一七四頁、昭和五九年一〇月）
- 5、論語徴の君子像（『寺小屋語学・文化研究所論叢』三号、一二七頁～一五二頁、昭和五九年一二月）
- 6、陰符經考異撰者考（『中哲文學會報』一〇号〈東大中哲文學會〉、五〇頁～六九頁、昭和六〇年六月）
- 7、荻生徂徠の「學」解釋（『中國古典研究』三三号〈中國古典研究會〉、二二頁～三四頁、昭和六二年一二月）
- 8、荻生徂徠の漢字認識（『湘南文學』二二号〈東海大学日本文学会〉、七七頁～九四頁、昭和六三年三月）
- 9、「七經孟子考文」攷（『湘南文學』二四号、一頁～九頁、平成二年三月）
- 10、「七經孟子考文」凡例の考察（上）（『東海大学紀要 文学部』第五五輯、一頁～一一頁、平成三年九月）
- 11、「七經孟子考文」凡例の考察（下）（『東海大学紀要 文学部』第五六輯、一頁～一六頁、平成四年三月）
- 12、山井崑齋の尚古思想（『中国哲學』二二号〈北海道中國哲學會〉、二二頁～四一頁、平成四年一〇月）
- 13、「近思錄」に於ける格物致知説（『湘南文學』二八号、一頁～一四頁、平成六年三月）
- 14、「四書集注」吳氏刊本の意圖（『中国哲學』二四号〈北海道中國哲學會〉、一五二頁～一七二頁、平成七年十二月）
- 15、「論語或問」攷（『湘南文學』三〇号、一一頁～一九頁、平成八年三月）
- 16、契崇『輔教篇』初探（東アジアにおける佛教と土着思想の交渉に關する總合的研究〈科學研究費基盤研究報告書〉、一一頁～一六頁、平成九年三月）
- 17、「孟子集注」に見える「物」の解釋（『文化』十八号〈駒澤大学文學部文化學教室〉、一～一五頁、平成



- 一〇年三月)
- 18、中國知識人の死生觀（上智大學學内共同研究「生と死をめぐる比較思想」一九九八年度報告（資料）、一七頁、平成一一年二月）
- 19、儒學の現代的意義序説（『二十一世紀儒學文化に關する國際會議 報告論文集』、五七頁～六七頁、平成一二年六月）
- 20、『論語精義』の成立と展開（『文化』二十号〈駒澤大學文學部文化學教室〉、九五頁～一二一頁、平成一三年三月）
- 21、『四書集注』における「程子曰」の考察（『文化』二十一号〈駒澤大學文學部文化學教室〉、一〇三頁～一四四頁、平成一五年三月）
- 22、『論語大全』の思想性―学而章の大全をめぐる―（『季刊日本思想史』七十九号〈ぺりかん社〉、平成二四年）
- 23、山崎闇齋「仲秋主靜齋即興」詩に就いて…揖斐高『江戸漢詩選』劄記一（『文化』四十號、一～一三頁、令和四年三月）
- 〔翻譯〕
- 1、碧巖錄第一則訳注（禪語録研究会訳）（『禪文化研究所紀要』十四号、一六五頁～二〇〇頁、昭和六二年三月）（禪語録研究会Ⅱ末木文美士他三名と共訳）
- 2、『南岳思大禪師立誓願文』訳解（中国仏教研究会訳）（『多田厚隆先生頌壽記念論文集 天台教学の研

究」、四四九頁～四八六頁、平成二年)

- 3、碧巖錄第二則訳注(禪語録研究会訳)、『禪文化研究所紀要』十七号、二二九頁～二五〇頁、平成三年五月)
- 4、『碧巖錄』第三則～第三〇則訳注(禪語録研究会訳)、『宋代禪籍の文獻的研究』『碧巖錄』を中心として——平成元～三年度科学研究費補助金(研究代表者 末木文美士)研究成果報告書——、二二八頁、平成四年三月)

〔書評〕

- 1、小島毅著『宋學の形成と展開』(『文化』二十号(駒澤大学文學部文化學教室)、一八三頁～一九七頁、平成一三年三月)
- 2、土田健次郎著『道學の形成』を讀む(『文化』二十二号(駒澤大学文學部文化學教室)、五五頁～六五頁、平成十六年三月)
- 3、浅山佳郎、嚴明著『伊藤仁齋』(『湘南文学』三十八号、一三二頁～一三六頁、平成一六年三月)

〔口頭発表〕

- 1、朱熹と道教をめぐる一側面——『陰符經考異』考(第二九回東方學會全國會員總會(於東京國立教育會館)、昭和五四年一二月)
- 2、朱熹に於る政治と學問(日本中國學會第三十三回大会(於北海道大學)、昭和五六年一〇月)
- 3、陰符經考異の思想的功夫(日本中國學會第三十四回大会(於廣島大學)、昭和五八年一〇月)
- 4、中國知識人の死生觀(上智大学「生と死をめぐる比較思想」研究會(於上智大學)、平成一一年二月)

5、儒學の現代的意義序説（二十一世紀儒學文化に關する國際會議（於東日本國際大學）、平成二二年六月）

〔講演〕

1、漢和辞典の源流（平成三年度東海大学付属高校教員現職教育研修会、平成三年七月）

〔事典類〕

1、礼の思想（『日本宗教事典』、弘文堂、昭和六〇年二月）

2、易、易經、八卦、書經、詩經、春秋、礼記、礼（『日本宗教ポケット辞典』、弘文堂、昭和六一年三月）

3、太極、太極図説など（『日本大百科全書』、小学館、昭和五九〜平成六〇）

4、四書集注、四書或問、伊洛淵源録、易學啓蒙、延平答問（『中國文化史大事典』、大修館書店、平成二五年五月）

〔雑文〕

1、「儒教ルネサンス」に考える 必要な漢学の再発掘（『東海大学新聞』564号、平成二年七月）

2、久保陽一先生を送る（『文化』三十二號、一〜四頁、平成二八年三月）

3、丸谷晃一君の思い出（『伊藤仁斎の古義学…稿本からみた形成過程と構造』、ぺりかん社、平成三〇年に所収）